

命の重さ

高山市立朝日中学校3年 深澤 菜月

命の重さに違いがあるのか・・・

私は昨年夏以降、母と車に乗って話をする時間が増え、命の重さについて話をするようになりました。新型出生前診断のことや元ハンセン病患者の方の話を聞きました。そしてそのことについてよく話をするようになりました。

出生前診断は赤ちゃんが生まれる前に障がいの有無を調べる検査です。以前からいくつか検査方法はあったようですが、結果が不確定であったり検査の出来る時期が遅かったりリスクも大きいものでした。しかし、新型出生前診断は血液検査ででき、リスクもなく感度も高く、特にダウン症候群に対しては九十九%発見できるなどとなっています。高齢出産では染色体異常の赤ちゃんが生まれてくる可能性が高くなるため、検査をする人が増えているそうです。そして、赤ちゃんの染色体異常が確定した場合、九割以上の方が中絶を選択していると聞きました。私はそのことを聞いてとても驚きました。障がいを理由とする差別の解消やバリアフリーなどが叫ばれている現在、生まれる前から命の選択がされていることにショックを受けました。

私の姉はダウン症候群なので、私は母に私を産む時に出生前診断を受けようと思ったことはあったかを尋ねたことがあります。母は受けるかとても悩んだと言いました。医師には検査の結果が陽性だった場合にどうするかを決めてから受けるように言われたそうです。検査の結果が分かってからどうするか考えていると、中絶が出来る時期を過ぎてしまうからとの理由からだったそうです。私の母は検査のリスクや、検査結果が分かる頃にはお腹の中で元気に動いているだろうと考えて受けないと決め、もし生まれてきて障がいがあったとしても、そのことを受け入れて育てようという選択をしたと言いました。

ニュースや新聞では元ハンセン病患者の方の話や障がい者に行われてきた強制不妊手術の話など取り上げられていますが、出生前診断もそれらと同じことじゃないかと母と話しました。障がい者を排除する、障がい者は障がい者を産む、伝染しない病気なのに伝染すると思う・・・など間違った知識によって苦しんできた人、苦しんでいる人がたくさんいると思います。

障がいのある人の命も、病気のある人の命も、これから生まれてくる命も、今生きている私たちの命と何ひとつ変わらないと思います。命に優劣をつけるのは生きている人間の都合で、自分勝手な誤った価値観からく

ると思います。

ただ、新型出生前診断により染色体異常があるとわかり産まないという選択をした人が全て間違っているとは考えません。人にはそれぞれ事情があることも分かっています。産まない選択をした人もとても悩み苦しんだと思うし、選択が正しかったのかを一生考えていくのではないかと思います。

だから、私は安易な気持ちで新型出生前診断を受けたいとは思いません。それは命の選別につながっていると考えるからです。なくなってしまってもいい命なんて一つもないと思います。

私は、たとえ障がいのある子供が生まれてきても大丈夫とみんなが思えるような世の中になってくれたらいいと思います。そんな世の中なら、人種による差別も、病気による差別も、いじめも、その他のいろんな差別もなくなると思います。

そのために私に何が出来るのか考えてみました。私にはダウン症の姉がいることで、障がいを持つ子供や親さんと会う機会があります。そんな時は特別扱いしたりしないで普通に接するようにしています。私の中で障がいのあることが特別なものではないのでそうできるのかもしれませんが。だから、私の友人にも同じように姉や障がいのある方と接してもらいたいと思いました。そして、障がい者と触れ合う機会を持ってほしいと考え、姉の通っていた支援学校で製作している商品の販売会や文化祭などに誘って一緒に行ったりしました。

小さなことかもしれませんが、障がいは特別なものではないと友人に伝え知ってもらいそれをまた友人が他の人に伝えていく。それは最初は小さいつながりだけれど、だんだん大きなつながりになっていくと思います。そうして、障がいに対する偏見や間違った知識を正していくことが出来たら、この世の中はとても優しくなると思います。

すぐには難しいことかもしれませんが、一人ひとりが考えていくことで少しずつ実現していけると信じています。